乱歩氏の諸作

平林初之輔

青空文庫

江戸川乱歩氏の作を『新青年』所載「悪夢」と「孤島の鬼」と二つ読んだ。「悪夢」は氏の旧作「白昼夢」などとともにグロテスクをねらった作品である。四肢も耳も口もつぶれて、肉塊のような存在となっている廃中尉とその細君との変態的性生活を描いたものである。江戸川氏の想像力の怪異さはある意味で、世界の文学にも類例のない程のもので、この作品でも、そういう人間を性的享楽の対象に考えだしたいうことは私たちを驚嘆させる。

それにもかかわらず氏の筆には新鮮味が甚だ乏しく、常識的といってもよい程な生温い、説明的な文章である。だからこの作者の作品には詩がありそうでかえって詩がないのである。だからどんな途方もない想像をもってきても、読者を吃驚させるような強さがなくて、これでもか、これでもかとおさえつけている間に、下手をすると作者の方がくたびれてしまうのである。だから表現が冗長になって、作者の想像力の効果を、その常識的な、説明的な文章の力で相殺してしまうのである。

次に、これは是非もないことかもしれぬが、作者の想像力が、常に変態的な、異常なもののみ向けられることに対して私たちは不満を感ずるのである。もっと常態な、健康なものの中に神秘を見出だすという方面へ氏の努力が転向されたなら、氏の想像力はもっと効果のある作品を生みだすに相違ない。多くの場合氏は、自分で想像したもののあまりの異様さに自分自身が圧倒されている。そして軽快を、朗らかな要素を欠いているために、一部の読者には偏愛さ

れるかわり、はじめから大衆性を失っているのである。

「孤島の鬼」は、まだほんのプロローグに過ぎないので、やがて展開すべき事件の内容によってこの作品のストーリーとしての価値は決定されるのであるから、その点に対しては批評を避けるが、この作においては、特に、やがて発展すべき事件の怪奇さを、作者が何回もくりかえして予告的説明をしているのが眼ざわりである。これだけの説明をしいしい事件を展開していったのでは読者は大抵のことでは驚かぬようになっている。手法の上において注意すべき点だと思う。

探偵小説における江戸川乱歩氏と大衆小説における大仏次郎氏とはある一点において共通したところがある。両氏ともにその作品に「芸術的」要素をとりいれようとしている点がそれである。もちろんそれはよい心がけであって、ただのバス・タイム・ストーリーで満足している人々にとってはこの両氏の出現は脅威でなければならぬ。だがそれと同時に、この両氏が、いわゆる「芸術小説」においてふみならされた領土に「芸術」を求めようとする時、この「進出」は甚だ意味の少ないものとなるであろう。

（『東京朝日新聞』一九二九年一月五日）

青空文庫情報

底本：「平林初之輔探偵小説選2［#「2」はローマ数字、1-13-22］〔論創ミステリ叢書2〕」論創社
2003（平成15）年11月10日初版第1刷発行
初出：「東京朝日新聞」
1929（昭和4）年1月5日
入力：川山隆
校正：門田裕志
2011年1月4日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

乱歩氏の諸作

平林初之輔

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/